

私の思い、意志、そして願い

三月三十一日
原発容認派のモノローグ、エピソード

今、三月三十一日、朝である。雨が降り、稲妻が光っている。柏崎では温かな日差しが数日続いたが今朝はその怒りが未だ続いているがごときである。

パベルの塔を思い出す。

私は十四年間の市議会議員活動、その後二回の市長選挙候補者として政治活動を行ってきた。原子力発電に関しては一貫して「容認」の立場で発言をし、行動してきた。核燃料サイクルに伴ういわゆる「プルサーマル」計画にも理解を示し、容認の立場でリードしてきた。

正直に言えば、この度の地震においては、十二日の爆発の時点で既に原発の運命が見えた様に思えたのだが、この期に及んでまだ、原発の可能性について探る自分から、ことも否めない。もう少し落ち着いてからと自分に言い聞かせる言葉は自らの感傷を戒める言葉でもあり、自らの臆病を取り繕う言葉でもあったのだ。だが、もう二十日が過ぎた。

私のブログは、「海・山・川で考える」である。浅はかな題名である。自然を愛する者がごとき傲慢はその自然によって「格」の違いをまざまざと思ひ知らされた。不明という言葉のみが頭の中によぎり、脱力感が支配しつつある自分にそれでも残された意識や意志があるのだと自覚させるのが原発であった。

二〇〇五年三月九日から二〇一一年三月十日まで、六年間、私が原発に関してブログに書き綴ってきたことをまとめるならば次の三つである。

1. 原子力は「容認」すべきエネルギー創出手段である。CO2排出等地球温暖化への対応を考えれば、ベストではないが、燃料電池の実用化、またその他太陽光や風力などいわゆる再生可能エネルギーの現実性と実用性が確保されるまでは、ベター、つまり「次善」として容認すべきである。
2. 原子力には潜在的危険がある。よってこれを厳しく規制する姿勢、体制、組織が必要である。原子力安全委員会と原子力安全・保安院を統合し、原子力を専門とする執行力を伴った原子力規制委員会を作るべきである。
3. 柏崎は原子力を産業と考えるべきではない。柏崎の増設を求めるのではなく、

原発のオペレーション技術、耐震対策、原発の基礎・基幹部品製造をもって柏崎経済のベースとしていくべきである。

「強く、やさしい柏崎」は3年前、私にとって2回目の市長選でのキャッチフレーズであった。原子力技術、環境技術で稼ぎ出し、経済の土台と為し、そのお金を医療や福祉、教育の充実に使うというのが私の考える「柏崎の姿」であった。

私自身も公の立場に身を置いて発言してきたことを鑑みれば一定の責任がある。これにおいて私は自らの不明を恥じながら、今現在、そして今後について考えていること、感じていたことを書き記すことをもって過去への戒めの一つとしたい。そして、私を含め、国民一人一人が今回の事態を深く考え、できる限りの責任を分担するべきである。

1. 今、日本に求められているのは原子力発電の安全施策の抜本的見直しだけではない。エネルギー施策の抜本的見直しである。
2. 日本国は今後二十年度で原子力発電を撤廃する。原子力発電からの撤退と代替エネルギーの開発を宣言し、可及的速やかな断固たる実行を国が行うべきである。

3. よって核燃料サイクルは行わない。核燃料廃棄物は中間貯蔵施設立地点の青森の許可が得られない以上は一時的にはそれらの原発立地点においての貯蔵を考慮。最終処分場の選定を国内外において急ぐ。IAEAなどと連動しながらの国際連携による共同処分場構想にも着手するべきである。

4. 柏崎・刈羽を含め既存の原発立地点においては国ならびに電気事業者の責任で今回の事故から得た教訓を速やかに実施しながら当面電力の供給に協力せざるを得ない。今、既存の原発を止めることは日本経済、ひいては国民の命をも脅かすことになる。誠に皮肉ではあるが発電の継続を認めざるを得ない。

5. 再三再四申し上げ、書いてきたことだが、国においては原子力安全・保安院と原子力安全委員会を統合し、経済産業省から独立させ、国家行政組織法第三条に基づく執行力を伴った行政機関、「原子力規制院」として機能させるべきである。

①既存の原発においては、津波対策のみならず、あらゆる自然災害を「想像し」、考え得る限りの危険回避、危険軽減施設、システムを構築する。安全対策ではない。

②既存原発立地点は、固定資産税とは全く別の観点から、つまり減価償却という観点からではなく、古くなるものには基本的に

リスクが高まるという観点から、経年累進課税を持つて、原子力施設危険負担対策税を課す。

③また、使用済み核燃料税に関しては本来原発サイト内にあるべきものではないと言ふ観点から、同じく経年累進課税を導入し、その税率を上げる。

④津波対策、非常用電源対策も兼ね、各地原発近隣部にLNG火力発電所などの建設を行う。各原発内の使用済み核燃料一時保管施設拡充との抜本的な安全施策の確保を図る。

⑤国民がなすべきことは、圧倒的な節電である。計画停電、計画節電、電気料金値上げ、増税を含め拘束力、強制力を伴った消費電力の抑制策である。

以上、国も、東京電力も、柏崎市も、私も、私たちが、様々な思いを抱きながらも、しかし決然と自らの責任を担うことを誓い前へ進むべきである。人知は自然の下において謙虚であるべきのみ機能し得るといふ冷徹な事実を見据え、日本はエネルギー施策において名譽ある地位を求め進もうではないか。

白みはじめた窓の外を見やりながら、ひとまずキーボードから離れることとする。決然と謙虚に。祈りながら、願いながら、恥ずかしながら。

六月十一日 村上春樹氏の発言・私の親友

作家、村上春樹氏の発言と私の親友について書きたい。先ずは村上春樹氏の六月九日スペイン・カタルニャ国際賞受賞にあたってのスピーチである。

「非現実的な夢想家として」(抄)

僕が語っているのは、具体的に言えば、福島原発の原子力発電所のことです。

日本人はなぜか、もともとあまり腹を立てない民族です。我慢することには長けているけれど、感情を爆発させるのはそれほど得意ではない。そういうところはあるいは、バルセロナ市民とは少し違っているかもしれない。でも今回は、さすがの日本国民も真剣に腹を立てることでしよう。

しかしそれと同時に我々は、そのような歪んだ構造の存在をこれまで許してきた。あるいは黙認してきた我々自身をも、糾弾しなくてはならないでしょう。今回の事態は、我々の倫理や規範に深くかわる問題であるからです。

原子力発電を推進する人々の主張した「現実を見なさい」という現実とは、実は現実でもなんでもなく、ただの表面的な「便宜」に過ぎなかった。それを彼らは「現実」という言葉に置き換え、論理をすり替えていたのです。

それは日本が長年にわたって誇ってきた「技術力」神話の崩壊であると同時に、そのような「すり替え」を許してきた、我々日本人の倫理と規範の敗北でもありました。我々は電力会社を非難し、政府を非難しました。それは当然のことであり、必要なことです。しかし同時に、我々は自らをも告発しなくてはなりません。我々は被害者であると同時に、加害者でもあるのです。そのことを厳しく見つめなおさなくてはなりません。そうしないことには、またどこかで同じ失敗が繰り返されるでしょう。

このスピーチのことを親友に告げ、改めて原発に関する私の認識と過去における言動が「間違っていた」ことを書いたところ、「誰よりも安全を願う、村上春樹が言うように新しいエネルギーについては考えていたのだから、やるべきことはやったのだと自信を持つように」というメールを送ってくれた。

この男は私の幼なじみであり、後援会長を務めてくれた男であり、小心者で、人前では話ができない男である。ただ、私が初めて市議会議員に立候補したとき、私という人間を極めて正確に描写した温かな文章を寄せてくれた男である。十年ほど前、原発プルサーマル問題で苦境に立ったとき、「お前が共産党になると言えば俺も共産党になる、そんなもんだ」と言ってくれた男でもある。その彼に私は後援会を含む私に關連する政治団体がこの三月三十一日ですべて消滅したことを告げた。

九月二十六日 命、言葉、原発

いきなり大上段で恐縮だが、先週末、「命」を考えさせられる機会が続いた。時間外の病院で、医師、看護師の皆さんが共に駆け回る忙しさを目の当たりにした。看護師さんは本当に走っていた。救急隊員の繁忙を共有した。

ベッドの上の病人。言葉を発することもできず、体の自由がきかず、認識を失う、という事態を回りのものたちはどのように受け止めればよいのか。表面上、本人は気持ちよさそうに寝ているのだ。命、という漢字に「一口」という文字があることを考えれば、言葉は大切な要素なのだと思えて気が

付かされた。

さて、言葉を失う、というのは唯然とする、あきれる、という意味で使うはずだが文字通り、心に思うその本音を言葉にすることをできず、意思疎通ができない事態は辛く、悲しいものである。

分かってはいた、うすうす気付いていたけど言い出せなかった。こんな事態を私たちが反省しなければならぬと思う。反省の度合いはそれぞれ異なるのであるが、反省をしなければならぬと思う。

原発の推進・容認の立場で進んできた私たちは技術を過信し、安全、安心ということの結果としてないがしろにしてきたこと、結果として、

原発反対、脱原発派の皆さんの立場で考えれば原発を止めたのは結果として「運動」ではなく自然であったという事実。結果として、

保守は賛成、革新は反対、イデオロギーで賛否を論じられた原発。経済か、命か、二者択一で論じられた原発。

国、電力会社だけに責任があるのではなしに、原発推進派も容認派も反対派も結果として、国民は電気に開かれた豊かな生活を享受してきた。また、原発立地点に住む者たちは、無条件に拒否してきた意志の強い方々もおられるだろうけれども、大方の人はその恩恵を享受してきた。ハコモノであるのが、交付金であろうが受け入れてきたのだ。結果として、私たちに責任はあったのだ。

同じことを同じように繰り返してはならないと思う。立場ある方々にお願いたしたい。イデオロギーを越え、目の前を見た、先を見た、そして本音の言葉を発信して頂きたいと思う。福島のことを共有し、発信して頂きたいと思う。柏崎から。

本当にありがとうございました。

桜井まさひろ後援会、地域政党柏崎米山、桜葉会は本年3月31日をもってその役割を終えました。また、平成20年12月27日産業文化会館で行われた会合にて設置された募金箱の中身、¥153,067が過日届くれました。些少の金額を加え、桃・柿育英会(代表安藤忠雄氏)に協力させて頂きました。悪しからずご了承下さい。よろしくお願い申し上げます。